

2007年IAEA核反応データセンター会議報告

Report on 2007 Nuclear Reaction Data Centres Meeting

札幌学院大学社会情報学部
千葉 正喜

CHIBA Masaki
Department of Social Information, Sapporo Gakuin Univ.

Abstract

We report on the 2007 Nuclear Reaction Data Centres Technical Meeting on October 8-10, 2007 at the headquarter of the International Atomic Energy Agency (Vienna). In this meeting, technical items of EXFOR and CINDA were discussed. Technical proposals from JCPRG were discussed and accepted for the most part.

1 はじめに

IAEA主催の「核反応データセンター国際ネットワークの技術会合 (Technical Meeting on the International Network of Nuclear Reaction Data Centres)」が2007年10月8日～10日にかけてウィーンの国際原子力機関本部で開催された。このネットワークの会合は毎年開かれるが、センターの長を含む全体会議と技術部会がそれぞれ隔年で開催されることになっており、今回は技術部会であった。

JCPRGを代表して大塚直彦氏と千葉が参加した。この会議の参加者は、参加者名簿によると、ハンガリーから1名: Takacs、日本から2名: 大塚と千葉、韓国から1名: Lee、ロシアから2名: BabykinaとMikhaylyukova、ウクライナから2名: GritzayとKlimova、アメリカから1名: Oblozinsky、OECDから2名: HenrikssonとSoppera、オブザーバーとして、オランダから1名: Koning、スロバキアから1名: Hlavac、コンサルタントとして、NDSを退職したばかりのSchwerer、ロシアのTaovaとVarlamovの二人、それにIAEAからDunaeva (Scientific secretary)、Nichols(Head of NDS)、Mengoni、Zerkinが登録されている。

会議は、IAEA核データ課長A.L.Nichols氏のIAEAを代表しての開会の挨拶で始まった。この挨拶の中で、2007年7月に亡くなったCAJADのChukreev氏の貢献に対して謝辞が述べられた。議事日程を確認し、テクニカルセッションの議事をDunaeva氏が務めた。

一般セッションの主要な議題は、参加11センターからのステータスレポートの提示とそれぞれおかれている状況と変化、課題の進行状況のレビュー、および次回のNRDC会議の日程と場所であった。そして、EXFORに関する一般問題、データコンパイル統計、マニュアル、EXFOR/CINDA辞書システム、CINDAブック、EXFORソフトウェア、EXFOR技術問題、品質管理問題でそれぞれ個別に議論された。すでに、IAEAから参考文献として記載したこの会議の正式の報告書 [1] が出ているので、議論の詳細は割愛して、私が特に興味を持った点に絞って報告する。

2 関心を持った議論

一般セッションの主要な報告は参加 11 センターからのステータスレポートの提示である。われわれ日本核反応データセンター（JCPRG）からは、添付資料 1 に基づき簡単に報告した。

議論の中で、特に関心を引いたのは、Oblozinsky 氏が EXFOR などのデータベースのフォーマットを最新の技術を取り入れた近代的なものにすべきとの発言があったことである。EXFOR は 30 年以上前の技術をベースとしており、種々の議論の結果、交換フォーマットなどを注意深く改良すべきとの認識ではおおむね一致した。われわれの報告の中でも XML の採用に触れたことの意味があるように感じたが、実現にはそれなりの労力を伴うことになると思われる。Zerkin 氏からは、EXFOR + フォーマットの報告があったが、フォーマットの近代化からは距離があるように感じた。

第 3 日目の午後に、オランダの A.Koning 氏が加わり、特別セッションがあった。新しく組織された WPEC のサブグループ 30 の活動：“EXFOR データベースをアクセスビリティと質の改良”について紹介があった。NRDC と SG30 が密接に協力して目標を達成する必要があること、それが可能であることが議論された。

3 まとめ

会議の議論で提出された Working Paper は 23 あったが、大塚氏および大塚氏との連名のものが EXFOR の技術問題で 7 件を占め、大活躍であった。これは大塚氏の努力と JCPRG のアクティビティの反映で、大変頼もしく思った。そして EXFOR システムの近代化の必要性が明らかになるとともに、SG30 の活動の報告に現れたように NRDC の活動も他との協力・競争の関係に入ったようにも感じられた会議であった。

次回の NRDC 会議はセンター長を含む全体会で、2008 年 9 月後半にロシアのオブニンスクで開催を予定されているが、ここではどのような展開がみられるであろうか。

添付：JCPRG のレポート

参考文献

- [1] O. Schwerer and S. Dunaeva: “Report on the IAEA Technical Meeting of the International Network of Nuclear Reaction Data Centres”, INDC(NDS)-0519, November 2007.